BROADCASTING CREATOR'S ASSOCIATION

放送人の会

NO・13

2002・11・5
発行

〒102－ 0094 千代田区紀尾井町1－1 千代田放送会館 3階
TEL & fax 03－3221－0019
E-mail info@hosojin.com
代表幹事 大山勝美 編集担当 伊藤雅浩、松尾羊一

二〇〇二年・回顧と課題と

大山 勝美

来年のテレビ開局五十年をにらんで―現場はどのように準備し本番を迎えたのか―『テレビ開局への熱き思い』という公開シンポジウムを開いた。（十月五日、上智大学、放送芸術学会との共催）パネラーは、開局当時AKにいた合川明、BKの和田勉、NTV池田義一といったドラマ関係者で、コーディネーターは私がつとめた。七十名くらい集まったであろうか。実話のもつ強さで、内容は硬軟とりまぜて豊か。当時の朝・毎・読の新聞記事が紹介されたりして、会場は盛り上がった。

当会は、放送五十年の現場体験者の集団ともいえる。この種のシンポは、ジャンル別世代別に続ける必要があるのではなかろうか。

従来からの事業―「人と研究」「名作の舞台裏」「インタービー」「放送人の証言」はお蔭様で順調に進んできて、あとは「グランプリ」の準備を残すのみである。ことしはそれに新顔が加わってきた。「ローカルふだん着フォーラム」と検討中の「昭和放送論研究」である。

「ローカルふだん着フォーラム」は、当会が合言葉にしている四超―組織・ジャンル・世代・地域を超える―の中で唯一触れていなかった超地域に焦点をあてているだけに、貴重であり息長く続けたい企画である。

ことしは手弁当による数人の勝手連のような精力的な努力で実っている。川崎の「地方の時代映像祭」が終了した現在、地域ブロックの集まりは別にして、地方の制作者たちが一堂に会する機会はほとんどない。当日はあいにくの台風だったが、参加した地方局の人たちは眼を輝かせていた。

折角の催しを長く続けるには、関係者を横断した幅ひろい運営母体をつくり、他の関連団体の協力をえながら運営して行く必要がある。さらには中央に地方の人をよぶ形ではなく、地域の人たちが、自主的によびかけ集まり、語らい議論し励ましあう、といった地域の制作者たちが主役の催しを、横浜の放送番組センターで放送人の会が用意するという形にした方がいいと思っている。

そのために放送番組センターと共催し、NHK、民放連、横浜市に後援してもらう体制づくりも必要であろう。いずれにせよ、NHK、民放連とが協力しあっている（社）放送番組センターとの共同事業は大切にしていきたい。

「昭和放送論研究」（仮）も、検討会を重ねてきている。議論百出。ひと頃、民放局が出版していた研究誌もひっくり返すというのだから、手をひろげ出したらきりがない。放送批評懇談会やNHK文研、民放連研究所、各大学の特に若手の研究者たちとの共同作業でなければ到底なしえない作業である。

放送人の会が中心になってまとめて行くとなると、やはり現場に即した、現場に影響をつよく与えた放送論ということになろうか。

来年のテレビ五十年の節目に、私は全会員の方にアンケートをお願いしたいと考えている。①テレビ開局五十年に想うこと②私に影響を与えた番組、制作者、考え方や論文、出版物、についてである。集計されたアンケートは、「昭和放送論研究会」の有力かつ貴重なデータとなるにいない。何よりの懸案は、名誉会長の口ぐせでもある「若くて新しい会員の獲得」である。なるほど当会の平均年齢は高い。しかし現場OBを中心の会で「屍体解剖」をしている会ではない。たえずいまの放送番組制作者や関係者に刺激をあたえ、現場を活気づかせ元気を生む会でありたいと願っている。

鵠沼海岸から ⑥

名誉顧問　川口幹夫

ＮＨＫをやめてから早くも五年半になった。ＮＨＫの前の五年間がＮ響だった。来る日も来る日も音楽についての計画立案、実施、お客さんへの対応だったから、たまらなく楽しい日々だった。

だが次にやってきたＮＨＫ会長の六年間はまことに苦難の日々の連続だった。勿論放送という仕事はやり甲斐のある、たのしい仕事なのだが、それを盛り立てるための数々の仕事は決してたのしい事ばかりではない。私のような人間には、時に苦痛なこともあった。だから六年間が終った時、私は心からホッとした。さあ、あとは自分の好きなことだけやろう！　いやなことは一切やるまい！　だが世の中、そんなにうまくはいかない。何よりも体がガタガタになっていた。気力だって大分ユルユルになっていた。思い切って東京を離れて湘南に移った。仕事も整理して①放送関連のこと　②青少年のためのこと③郷里鹿児島のこと　の三つしかやるまい。そうきめた。

今は昔にくらべればぐっと楽になった。ところが今度は迫ってくる「もの」があった。「寄る年波」というやつである。ちっとも歓迎しないのに、いつの間にか七十六歳になった。何と八十までもう五年をきってしまった。「ああイヤだ。年をとるのを止めよう！」　そう思っても情容赦なく年は過ぎてゆく。嘆きたくなった。天を呪いたくなたくなった。

でもこれは誰でも通る道。昔のようには出来る筈がない。観念してしまおう。細々と、ゆっくり出来ることをやっていこう。

鵠沼も秋深くなった。今日も海岸の波は静かだ。

2002年10月幹事会 経過報告　（ 10月26日15:00～17:00 於「コレド」）

出席者：大山、（以下五十音順）石井、石橋、伊藤、各努、北村、今野、斎明寺、鈴木（典）、田原、野崎、久野、松尾、明神、村木。

1。大山代表幹事より→日本放送芸術学会と共催でシンポジウム『テレビ開局50周年～テレビ放送への熱き思い』(10月5日於 上智大学)の内容報告(くわしくは別項大山記事参照)。

→当会と放送番組ライブラリーとの14年度催事契約を結ぶ。来年度の『ローカル番組フォーラム』の共催など。ほかに民放連、ＮＨＫ、横浜市など協力依頼折衝中。明神氏および田原氏より上記に関連して補足説明あり。

2。野崎氏より→『放送論研究会（仮）準備会報告（１０月15日 民放連会議室)。

出席:大山、松尾、伊豫田(東京女子大)、志賀放懇理事長、石井(清)、原由美子(文研),北村(充)ほか民放連関係者=の進捗状況。氏より「放送人に影響を与えた人、番組、論(書籍)、事件など」の会員アンケートの提案あり。野崎報告・提案に対し:「放送論」の範囲はどこまでか。単なるテキスト・クリティーク(文献吟味)なのか。必ずしも論に限定せず、映画、演劇、舞台、戦後の事件史と現場との関係論も。放送現場と“論”のズレを留意してはどうか。他団体(放送批評懇談会、マスコミ学会など)とのコラボレーション事業にしては、などなど活発な意見交換あり。

3。今野、斎明寺両氏より→ＩｎｔｅｒＢＥＥシンポ『時代・劇』協力開催。

4。石橋氏より→『名作の舞台裏』の件説明。(3と4の詳細は別途本誌に掲載 乞参照)。

5。村木氏より→『放送グランプリ2003』について運営説明。第1回の反省点。「ひと本位」の選考姿勢の確認など。・2003年は5月10日(土)に決定(会場未定)。目下次回選考委員の選考中。

6。松尾氏より→次回会報（新春号）の説明。50周年記念号としたい。全会員へのアンケート特集(「あなたにとってテレビとは何だったか」及び「あなたは現場で何に影響をうけましたか」 ）と「どうする放送人の会」大座談会など。新連載『放送人 証言史』久野浩平。

7。総務関係：北村氏より→・10月は新規会員無し。幹事および会員からの入会呼びかけをお願いしたい。・年度折り返し点を機に会費未納の方へ11月中に協力要請の予定。

・新しくメール設置の会員にはアドレスを事務局までご一報ください。　以上

南船北馬

サラウンド音声表現と私

沢口　真生

音に関わる技術学会としては、貴重な存在のＡＢＳ（ＡＵＤＩＯ　ＥＮＧＩＮＥＥＲＩＮＧ　ＳＯＣＩＥＴＹ・本部ニューヨーク）から永年の放送におけるサラウンド録音、ミキシング手法の開発とグローバルな視点での貢献に対して、ＡＥＳ　ＦＥＬＬＯＷＳＨＩＰ　ＡＷＡＲＤを授与されました。個人の活動がこうした形で認められるのはやはり大変嬉しいもので、素直に喜んでいます。サラウンド音声とは現在主流の２チャンネルステレオではなく、前方に　ＬＥＦＴ　ＣＥＮＴＥＲ　ＲＩＧＨＴ　の３つのスピーカー、後方にリアの　ＬＥＦＴ　ＲＩＧＨＴ　の２つのスピーカーを配置した５チャンネルの表現方法のことです。「そんなに多くのスピーカーを家庭においてどうするのか？」と感じる向きの方々もおありでしょうが、映画はデジタル制作デジタルシネマを検討していて、この音声には最大で１４チャンネルのサラウンドが計画されています。

現在のＤＶＤビデオやＤＶＤオーディオ、さらにはＳＡ－ＣＤ、そしてパソコンネットワーク内ファイル形式やゲーム音響、カーオーディオそしてわれわれの放送メディアにおいてもこれらを視聴者が享受できるインフラが整いつつあります。

私がサラウンド音声表現という領域に興味を持ったのは、80年代半ばでちょうどオーディオドラマが２ＣＨステレオ制作の定着期にあたる頃でした。ミキシングをしながらストーリーを表現したいときに２つのスピーカー内で表現するのは大変窮屈な感じがして「何かちがった表現方法はないかな？」と調査を始めました。当時ハリウッドの映画音響がドルビーステレオ（Dolby Stereo）という前方３ＣＨリアに１ＣＨの３－１という方式で映画音響を制作していました。自己投資をしながら放送制作での可能性を模索した結果、１９８７年にＮＨＫＦＭドラマの「シュナの旅」で第１作が完成したときは歴史を感じたものです。以来、90年代のハイビジョン３－１方式、そして２０００年ＢＳＨＤでの３－２方式と現在に継続され、多くの「サラウンドファミリー」が様々なジャンルでできつつあるのも嬉しい限りです。「人のやらないことをやる」という視点はどんなソフト制作者でも共通のキーワードではないかと授賞を機会に改めて考えてみました。

（ＡＥＳ・ＣＡＳ・ＢＳ会員）

放送人としての《遺言》

戸崎　春雄

今年９月「北の国から」の最後の作品が放送されたが、サブタイトルが《遺言》であった。父親の黒板五郎が他人の勧めで《遺言》を書くのだが、最後の作品に相応しいネーミングと感心していたが、その後放送された「ドキュメント・北の国から」を見て《遺言》の意味が更に強く胸に迫って来た。

多くのスタッフの中に、既に定年を迎えた人達が「北の国から」最後の制作に参加し、懸命に働いている姿があった。その中に21年間、一貫して「北の国から」の格調ある画づくりに貢献してきたチーフカメラマンがクランクイン寸前に糖尿病のため現地で緊急入院する事態が起こる。「彼なくしては「北の国から」は語れない」重要なスタッフの欠落であった。彼は現場を信頼するカメラマンに任せ、病院のベッドで必死に病と闘うのである。撮影最後の日、彼は撮影現場に現れモニター画面を食い入るように見つめている。そして最後のカット撮影の時、彼の代わりに大役を果たして来たカメラマンが黙ってカメラから離れ、彼に最後の撮影を託した。この無言劇が素晴らしかった。

また、俳優の地井武男さんは木材業の中畑を演じているが、劇中奥さんが癌で死亡する。実は中畑のモデルになっている方の奥さんが癌のため、去年２月に死亡していて、この話を倉本さんは《遺言》の中に入れている。

更に、地井さんの奥さんが癌に冒されていて、奥さんの看病の為レギュラーの中畑役を降りようとする地井さんに「最後まで演じるのが役者でしょう」と言う奥さんの言葉に出演を決意する。ドラマの中で中畑を演じる地井さんが「女房の癌が再発した!!医者は春までもつまいって言いやがった」というセリフがある。この場面の地井さんの演技にはとても泣けた。

このように「北の国から」制作の裏にも幾つかの《遺言》劇の存在している事を知り、言うに言われぬ思いが大きくなっていった。

〃若者達がテレビを見ない〃と言われて久しい。確かにテレビはなまぬるい状況ではあるが、我々放送人がテレビから強く感じた事をもっと明確に、もっと積極的に伝えていかなければと思う。我々はそう若くは

ない。早く伝えないと死を迎えてしまう。伝えるべき事を《遺言》にしたためる作業を即実行しなければならないと痛感する。

「北の国から」の中でのセリフに「《遺言》は六十過ぎたら書くのが筋だ。書いたところかもう何度となく書き直しとる」と友人に言われ、五郎が慌てるシーンがある。私は七十に近いのにまだ《遺言》の第1バージョンも書いたことがない。慌てなければ…。（元フジテレビ・ドラマ）

新しい「お山」へ

原　由美子

私は、NHK入局以来ずっと放送文化研究所に勤めております。先輩方のご縁があって「放送人の会」に加えていただきましたが、「放送」の現場で働いた経験は全くありません。視聴者の動向や編成・番組内容の研究という仕事をすることで、いわば視聴者と放送局の接点となる作業をしたい、と常々思って勤めてきましたが、この夏からは、外部の研究者や関係深い方々とのネットワーク作りが担当業務のひとつに加わり、一層具体的な形で接点作りを進めることになりました。今回は、この欄への執筆の機会をいただいたので、放送文化研究所のことを書かせていただこうかと思います。

NHK放送文化研究所は、愛宕山の山頂にあることから、NHKの職員や、研究所をよく知る方からは「お山」と呼ばれてきたのですが、今年1月に、近隣の高層ビルMORIタワーに引っ越し、「山」ではなく「森」になってしまいました。

さて、「お山」の方はどうなったかと言いますと、放送文化研究所はもともと放送博物館と同じ建物に同居していたのですが、研究所が引っ越した後、そのスペースを使って、放送にまつわる逸品を収集した展示機能を充実すると同時に、放送に関心を持つ方々との交流スペースとして活用されるよう、目下リニューアル中です。

館内には、川口にできるアーカイブスの映像にアクセスできるコーナーや、一般の方にも利用していただける放送関連の図書館コーナーも整う予定です。また地下には、研究会やセミナーなどを行う交流スペースも計画されており、来春のオープン以降、いろいろな催しを企画していきたいと考えております。

「放送人の会」の方々にも、さまざまな形で利用して親しんでいただける、新しい「お山」へと生まれ変わることと思いますので、是非ご期待ください。

（NHK放送文化研究所）

安心ラジオは安眠ラジオ

遠藤　ふき子

はじめまして。23年勤めたNHKを退職してドイツに暮らすこと4年、海外リポーターを経て、ラジオ深夜便のアンカーとして仕事をするようになって9年がたちました。深夜のラジオは夜中に目がさめた時、あるいは仕事帰りのタクシーの中で聞くという人が多いようです。でも早寝早起きの健康的な生活を送っている人には全く縁のない番組で、聞いたことがない方も結構いらっしゃると思いますので今日はラジオ深夜便のPRを。

深夜便は毎日夜11時すぎから朝5時まで、アナウンサーの現役OB含めて十四人が二週間交代で担当しています。年齢は50代から60代で平均年齢は61歳、私は下から3番目です。ほとんどの方が昭和30年代の入局、つまりラジオ時代に基礎訓練をしっかり受け、テレビの現場で経験を積み重ねてきた先輩というわけです。深夜便が中高年世代に支持されるのもその視聴体験がぴったり重なり「声も顔も知ってるあの人が話しているんだ」という安心感があるのかもしれません。

ラジオ深夜便は平成十年、菊池寛賞を受けました。「若者向けであった深夜の放送の中に中高年齢層にも聴くに耐える心やさしい番組を定着させるとともに、定時ニュースや緊急災害時の速報など、ラジオの役割の再認識とメディアとしての可能性を広げた」という評価を頂いたのです。深夜便のモットーは「いつでもどこでも安心ラジオ」です。静かな夜を願いつつ、常に緊急情報に備えて6時間の生放送を送り続けています。

深夜便はお医者さんの間で「副作用のない睡眠薬」といわれているそうです。夜中のラジオで静かに語りかける合間にかかるのは「青葉の笛」「里の秋」「白い花の咲く頃」等の懐かしい音楽ですから、ちょうど子守唄代わり自然に眠くなるのでしょう。

ラジオ深夜便が始まったのは平成2年です。昭和天皇のご容体報道のおり、深夜静かな音楽を中心に放送したことが、大きなきっかけとなりました。それまでは午前0時になると、翌朝5時まで放送はお休みだったのです。

夜中も音楽や人の声が聴きたいというたくさんの要望に応えて誕生したのが、ラジオ深夜便でした。

平成5年には聴取率が大幅に伸び、番組あてのお便りが月1000通に達しました。その頃は60代から80代の方のお手紙が中心でしたが、今では高校生から90代まで幅広い年齢層の方から反響が寄せられています。今年は大学生が深夜便を卒論のテー

マにとりあげ、最優秀賞を受けたという嬉しい報告までありました。

深夜便は時間帯によって内容が分かれています。11時から1時までは電話による海外リポートなどで今の世の動きを、1時から2時は各アンカーの企画インタビュー、2時から4時までは音楽とお便り、4時からは「深夜便こころの時代」そして5時前に「今日の誕生日の花と花言葉」を紹介して番組を終わります。ちなみに私の一時台は「母を語る」というテーマで来年100人目のインタビューをめざしているところです。

いろいろ欲張ってご紹介しましたが、もし夜中にお目覚めになったら、NHKのラジオをお聴きになってみませんか？そして辛口、甘口さまざまな感想をお聞かせいただければこんなに嬉しいことはありません。副作用のない睡眠薬も長い間には効果が薄れているかもしれません。ひとの声を大いに聞き、これからも地味だけれど飽きのこない、そんな番組を届けたいと思っています。

（「ラジオ深夜便」アンカー）

「キッズ・ウオー」の憂鬱

山本　恵三

連ドラ『キッズ・ウオー』は六本木のたむらプロの事務所で生まれる。脚本の畑嶺明、制作協力の田村恭一と千野栄彦、そして私の4人が集まり、企画からキャスティング、脚本（ホン）の直しまでを、建設中の森ビルを見上げながら話し合う。去年の春、短気な家主・田村がお腹を膨らませて喚き出した。「我が儘なんだから。もう止めよう」ーどうやら、主役の生稲晃子や川野太郎のスケジュールがきつくなり、アタマに来たらしい。「大変ですねエ」ー百戦錬磨の大ベテラン千野をはじめ、誰も相手にしない。ホンさえ早く出来れば、どうにでもなるのだ。「この鋏でイジメるの、去年もあったよ」ーウン、と畑。健康オタクの元役者はナカナカ頑丈である。「いいんだよ。イジメなんて同じだよ」ーソウカナ、でもマアいいか、と私。かなりいい加減である。「ホントに、いいんですか？」ーと、大ベテラン。温厚な紳士は気配りを忘れない。「大切な台詞は繰り返せって、言うじゃないデスカ」ー妙な理屈をつけてみる。それでなくても似たような設定や台詞が多く、飽きも来ていた。ホン屋も煮詰まっているのだろう。役者のスケジュールだけでなく、ホントに止めようかと話し合ってもいた。それがあの昨夏の大フィーバーである。一体何が起こったのか！心底驚いたのは、我々4人だったのかも知れない。夏に続いて、今年の冬にも2Hのスペシャルが企画されている。高校生になってしまった子役（？）を使い、いつまで『キッズ・ウオーズ』として今、納得できる終幕を模索しているところである。

（中部日本放送）

退役アナ雑感

土門　正夫

「アナウンサーてえのは一体、どんなことをするの？」

そんな若い学生が、友人に誘われるままにNHKの試験を受けたところ、何処でどう間違ったのかマイクの前に立つ羽目になってしまった。昭和26年のことである。

冷やかし半分で入った道であってみれば、そのスタートは惨憺たるものであった。

最初の赴任地、広島では地元紙に「今度きた新人アナはFK（広島放送局）開局以来、最低のアナである」と酷評された上、先輩のキツーイ愛の鞭（要するにイジメだが）にはさすがに参った。

「何時でも止めてやるわい」そんな開き直ったスタートだった。

そんな私が長い間、放送の現場で仕事を続けられたのだから世の中というのは面白いものだ。

私にとって区切りの年は、20世紀の終わり2000年にあった。

この年、私は70歳、古希を迎えた。アナ生活は半世紀、丁度50年を数えた。この節目の数字を宝にしてアナウンサー生活に終止符をうつことにした。スポーツ中継という苛酷な現場での50年にいい想い出と僅かな誇りをもって…。

さて、ここからはそんな年寄りの繰り言になる。

最近のスポーツ放送のアナ諸氏は、どうしてあんなに目立ちたがるの？なんで、ああも受けを狙うの？何故、あんなに絶叫するの？と不思議で仕方がない。

その最たるものがシドニー五輪でのFアナのサッカー中継だろう。「ゴール、ゴール」の連呼は30数回に及んだという。しかし、もっといけないのはそのあとである。

帰国草々、バラエティー番組に出し「私がゴール、ゴールと連発したので、そのあと実況したNHKのアナ達がゴールの瞬間をどう実況しようか困ったそうですヨ。アハハ！」Fアナは将来楽しみなアナと密かに期待していただけに、この時だけは何とも悲しかった。

戦前、ベルリン五輪で大先輩の川西三省アナが女子200米平泳ぎで「前畑ガンバレ！」を二十四回連呼した。その放送はいまでも名放送として語り継がれている。ところが河西アナご自身は「あの放送は実況としては誠に恥ずかしいものである。

実況というより単なる〝前畑ガンバレ〟の連呼にしかすぎない」と深く反省し、その録音は亡くなるまで二度と耳にすることはなかったという。

放送に対するこの真摯な態度、気概、品格の違いが、片や名放送としていまに残り、一方は思わぬひんしゅくを買う結果になったといっていいだろう。

このところ放送での言葉の乱れもひどい。

楽をして喋ろうとするから、すべてのアクセントが平板化してしまい、「古事記」が「乞食」になってビックリさせられる。

「ヤバイ」など汚い言葉がタレントだけでなく、最近はアナの口からも飛び出すから驚く。

アナ諸氏はどうして、あんなに急いで読むの？喋るの？…

と、ここまで書いた時、チラっと原稿をのぞき込んだ女房がポツリと漏らした。

「又また。こんなことばかり書いて…。皆さんに嫌われますヨ。現役の方も一生懸命やっているんですから…」このひと言でペンをおくことにした。

ホッとして濡れ縁に目をやると小雀が3羽、楽しそうに遊んでいる。

その背中にそそぐやわらかい秋の陽が優しい。

こんな気分でテレビを楽しみ、ラジオを耳にする時代がこれから来るのだろうかとフッと思ったりしている。

一寸、騒々しくありませんか？

「放送人の証言」現状報告

久野　浩平

これから毎号、「放送人の証言」収録内容の紹介を会報に連載することになりました。今回は先ず手始めにこれまで収録した「証言」の全リストを発表させて頂きます。

一九九九年四月、BKの音響効果マン昨本秀信氏、辻好雄氏から始まって今年十月の中道定雄氏まで、約四年間に四十名の方々の貴重な興味深い「証言」を収録することができた訳です。

これ以外にも現在、既に収録の了解を得て準備中の方、やりかけて中断状態にある方などが約十名いらっしゃいます。更には今後、幹事諸氏はじめ会員の皆様に積極的に取材対象者になって頂き、当初の目標の一〇〇名にできるだけ早く到達したいものです。（一〇〇名で終わりにするという意味ではありません）

リストをご覧になり、取材方針の不明瞭、対象者選択のかたよりなどお気づきのことが多々あると思いますが御意見をどうか遠慮なくお聞かせ下さい。私個人としては、民放各局に比してNHKテレビドラマのプロデューサー、ディレクターの「証言」が少ないことを気にしています。テレビドラマに関して主に収録を担当した私並びに大山勝美さんが民放の出身であるという点、反省材料です。NHKテレビドラマ現場出身の会員の方の取材者としての参加を切に期待する次第です。

これまで、会員の方から収録済みの「証言」を見せてほしいという声が数多くありました。「証言」は原則的にデジタルカメラで収録しているため、簡単に見て頂くためにはVHSテープに転換しなくてはならず、この費用、労力を捻出できなくてご希望にお応えすることができませんでした。

しかし、この十月やっと、甚だ原始的ではありますが、この転換の設備を事務局に整えることができ、週三度出勤している幹事諸氏が手分けして「証言」をVHSテープにコピーする作業を始めています。百二十本を越すテープ数ですからなかなか全部がコピーされ終わるということになりませんが、それでも既に十名ほどの方のコピーが終っています。リストをご覧になって、この「証言」を見てみたいと思われる方はどうぞ事務局にお問い合わせ下さい。会員の方に限り、原則的には事務局でご覧いただけるようにいたします。ご希望の「証言」がまだ転換されてない場合は優先的にコピーするようにします。

尚、全部の「証言」をVHSテープに転換したあと、オリジナルのデジタルテープは放送番組センター・放送ライブラリーに保管をお願いします。デジタルテープをディスクに変換すべきだという議論もありますが、それは先のこととして、この貴重なデータの今後の利用方法については研究・教育機関への貸与など考えられるのですがまだ具体的な案は出ていません。この件についても会員の皆様の御意見をお待ちします。

来号からは「証言」の内容を、具体的に証言者の言葉の採録の形でご紹介してゆくつもりです。断片的にならざるを得ないと思いますが、せめてこの貴重な「証言」について関心を高めていただくよすがになり、テープを見るため事務局まで足を運ぼうと思い立って頂ければ幸いです。

NO	収録日	証言・放送人	経歴	取材要点	取材担当者
1	99:04.07	辻好雄・作本秀信	元NHK大阪 効果マン	・BKラジオドラマ創成期音響効果班	斎明寺、久野
2	〃 04.10	高橋太一郎	元TBSチーフD.	・GHQ時代の民放開局裏面史	大山、村木
3	〃 09.01	岡本愛彦	NHK、TBS、フリー演出家	・『私は貝・・・』と芸術祭ドラマ	吉永、村木
4	〃 11.02	西沢 實	放送作家	・昭和50~60年代Rドラマ、架空実況D.とRドラマ発生史	斎明寺.上田
5	〃 10.01	吉村繁雄	元朝日放送副社長	・大阪地区民放設立秘話	澤田
6	〃 10.22	藤倉修一	元NHKアナウンサー	・戦中戦後の放送、録音探訪	各務
7	〃 12.／	長沢泰治	元NHK専務理事	・戦中戦後のNHK	各務
8	〃 01.21	北川 信	元NTVD.テレビ新潟社長	・『ダイヤル110番』など現場時代回顧	大山、野崎
9	〃 01.26	八橋 卓	元テレビ朝日D	・『判決』中止波紋の周辺	村木、久野、山本
10	00:01.26	浅田孝彦	元テレビ朝日P	・『木島則夫モーニングショー』のころ	久野、野崎
11	〃 03.27	関谷 則	元NHKCP	・戦時放送、婦人番組など	山路、斎明寺
12	〃 02.15	秦 豊	元NHK,RKB毎日	・レッドパージ、『ひとりっ子』問題	村木、久野
13	〃 11.06	島地 純	元文化放送D、露戯曲史	・Rドラマ共同制作時代、「水の会」など	久野、松尾
14	〃 12.06	津田 昭	元NTV P&D	・開局時代、NTVドラマ史的に	久野、石橋
15	01:09.06	蟻川茂男	元TBS P&D	・開局時代、『七刑』『東芝』など回顧	堀川
16	〃 09.12	加藤静夫	元TBS 照明	・テレビ照明の変遷史	大山
17	〃 09.19	大山勝美	元TBS P&D	・S30年代TBSドラマと人の特色	久野
18	〃 12.25	橋本 潔	美術デザイナー	・テレビ美術の史的周辺	久野
19	02:01.27	石井ふく子	元TBS P	・『東芝』ドラマの周辺と位置付け	大山、久野
20	〃 01.13	小倉一郎	元NHK P	・NHK.R&TVドキュメンタリーの歴史	各務
21	〃 03.01	川口幹夫	元NHK会長	・現場時代の回想、放送とは?	大山、久野
22	〃 03.19	川野楠巳	元NHK、R&TV D	・効果からPへ、視覚障害者とラジオ	各務
23	〃 03.29	荻野慶人	元読売TV、P&D	・宝塚映画からTVへ、その挑戦	大山、久野
24	〃 03.29	山本隆則	元TBS、テレ朝 D	・戦時自分史と開局ドラマ史	大山、久野
25	〃 03.29	小川秀夫	元文化、フジ P&D	・ラジオドラマからTV開局ドラマ回顧	大山、久野
26	〃 04.16	堀江史朗	元博報堂副社長	・映画、ラジオ、TV、代理店	久野、斎明寺
27	〃 06.18	和田 勉	元NHK生涯D.	・BK開局、TVドラマとは?	大山、久野
28	〃 06.20	嶋田親一	元CX P	・CXドラマ、新国劇担当のころ	大山
29	〃 06.22	澤田隆治	元朝日放送 P&D	・RからTV、寄席、大阪、バラエティ論	松本明、久野
30	〃 06.22	松本明	元朝日放送 P&D	・ABC時代劇、『裸の大将』の思い出	澤田、久野
31	〃 08.05	香西 久	元NHK ラジオ演出	・ラジオドラマ本格派のNHK時代	斎明寺
32	〃 07.05	川竹和夫	元NHK報道記者	・放送記者誕生、記者クラブ問題	野崎、久野
33	〃 ／	フランク馬場	GHQ,CIE放送課員	・占領下の放送、民放誕生秘話	鈴木(昭)、石井(清)
34	〃 07.09	岡田太郎	元CX D&P,共同テレビ	・CX調TVドラマ、時代劇SPなど	大山
35	〃 08.14	鈴木道明	元TBS M.P	・TV音楽プロの系譜、ジャズ。	大山
36	〃 08.20	原田庸之助	元電通P、	・外制プロデュースの回顧	大山
37	〃 08.23	村上七郎	元CX編成局長	・“母と子のフジテレビ”の背景	大山
38	〃 09.11	森川時久	元CX、現映画監督	・『若者たち』の真相、映画とTVの差異	久野、野崎
39	〃 09.28	柳沢恭雄	元電波ニュース社長	・レッドパージ、アジア視点の映像通信社	各務、川竹
40	〃 10.02	中道定雄	元NHK芸能局長	・NHK戦後の番組開発時代	各務

（以上が02年11月10日現在の取材済みリストです。報告：久野浩平、構成責任：松尾羊一）

『北の国から』の21年間

山田 良明

1980年、34歳の春、私は主婦向けホームドラマのディレクターをやっていた。同期に遅れること8年、30歳でやっとドラマにたどりつき、2年でディレクターになったものの、自分が求めていたのはこんな世界なのかと疑問を感じていた時だった。倉本聡がフジテレビで一年かけて連続ドラマを書くという話を小耳にはさんだ。何とかチームに入れないものかと、口も聞いたこともなかった中村（敏夫）プロデューサーに直訴した。

自分がいかに倉本聡を信奉しているか、とうとうとしゃべった。演出は既に決まっており、ロケの制作を手伝う予備ディレクターということでスタッフの一員となって北海道に向かった。

秋のロケでは俳優の送り迎えの運転手をやった。当時、旭川にジェット機は飛んでおらず、3時間かけて千歳まで迎えに行った。ある日、倉本さんが不思議そうに聞いた。

「山田君は制作の人？」

「いえ、私はディレクターです」

「ディレクターなら、カメラの横にいて先輩の演出を見ていなくちゃだめじゃないか！」

翌日から他の仕事は一切せず、杉田さんの演出の見学が私の仕事となった。私は倉本さんに一生足を向けて眠れない恩義を感じている。

24話のうち5話を演出させていただいた。倉本さんは、「大きな嘘をついてもいい。小さな嘘はつくな」と言った。これは脚本にも演出にも、演技にもいえるんだろうけれども、ちいさな嘘をつかないために、俳優には頭脳の指令よりも肉体の反応を重視して演技してもらった。吉岡秀隆、中嶋朋子、中沢佳仁の表現力は、彼らが10歳にも満たない時期からの、肉体化の訓練が多いに影響を与えていると思う。

肉体化というと、岩城滉一さんのボクシングの試合のシーンは全くの真剣勝負の中継であった。倉本さんは岩城さんが勝ってしまったら脚本を書き直す、という無茶な約束をして役者を追い込んだ。岩城さんのほうは、勝って本を変えてみせると、2ヶ月間特訓をして試合に臨んだのだ。結果は2ラウンドでノックアウトされ、意識を失い救急車で病院に運ばれた。思いどおりの展開になったが、一歩間違えばその時点でドラマは中止となっていた。

また、倉本さんにいわれた言葉に、「演出は、足してはいけない。引いてもいけない」というのがある。

演出家は、作家が書いた87点の脚本を自分の力で90点にしようとする。そうではない。87の小数点以下を何桁も読み取っていくべきだ、というのである。下手な演出をするな、ということだと理解はしたが、完全に納得はできていない。

「87 初恋」でプロデューサーになってから、杉田さんと二人で『北の国から』の最初の読者となった。脚本があがると喫茶店で落ち合い、倉本さんの前で生原稿を2時間以上かけて読む。

我々が一行一行読むその表情を、作家は鬼のように睨みつけている。もし受けなかったら破くからと脅かされて、でもいつしか本に吸い込まれ、自然に涙が泛かんでくる。読まれるほうも、読むほうも真剣勝負だった。実際に作家が本を破り捨て、撮影を一年延期したこともあった。

今回は、正吉役の中沢佳仁君が出演を固辞し、正直言って脚本は成り立たない、と思った。しかし倉本さんは厳しい条件を受け入れ、新しいストーリーを構築し、『2002 遺言』が出来上がった。

『北の国から』は大勢の人間の手によって作られた。そしてその核には一人の作家の、表現したい、伝えたいという強い意志がいつもあった。倉本さんという作家にぐいぐいと引っ張られて来た21年、つくづくテレビをやっていてよかったと思う。

私は少年時代、テレビを見て育った。ドラマから家族を知り、社会を知った。自分自身でもまだ、伝えたい事が残っているような気がしている。

（フジテレビ広報局長）

放送界多頻語事典 拾遺

（主夫之友社刊）

・ホンペン …活動屋用語。転じて本籍＝映画、現住所＝2Hドラマの監督サンたち、飲み屋で悪酔いした際に「オレッチだっていつかは『本編』を作りてえよう」と泣く。ワカルけど。

・カメラ目線… ビームを片手に虚空を見上げるウルトラマン氏の目印用竹竿を掲げるADが目線屋。エロオヤジをウインクでそそる渋谷のモー娘を〝必殺目線ギャル〟と呼ぶらしい。

・マター… 仕切りのこと。報道局デスクは大事件発生や総選挙の特番で「この枠は報道局マターで行く！編成さん、休止番組の手配してくれや」と舞い上がる。ドラマ班やバラエティーの外部プロは毎度のことに怒り狂い「え？マターかよ」とトホホ顔。諺に曰く「泣く子と報道には勝てない」

・スタカン… スタジオ管理の略。ヤミスタ（無届け無断使用）がばれると大変。スタジオ会議で優先権剥奪のペナルティーとなる。P&Dはショバ代のかさむ外スタ手配に大童となる。

教訓「ヤミほど高いものは無い」

・笑い屋… 公録で会場を盛り上げようと色物Pが仕込む常連のこと。「なんだい今日びは。やりにくいったらありゃしねえ」と師匠はオカンムリで「笑い屋どころか、嘶のツボもわからねえハズシヤだったぜ」。（鳶蛾蝶）

特集 ラジオ…WHO

ラジオ界を展望しますと、ナマ・ワイド・パーソナリティーの、いわゆる〝ラジオ三位一体神権説〟を克服し、トーク志向による情報量と質、わかりやすさと網羅性で独自のスタイルを視野に入れ、世代間を往還する成熟メディアの可能性が見え隠れします。

そこでラジオの現場人を中心に登場ねがい紙上フォーラムを開きました。

……　……

（問）　多様な情報環境にあってラジオの占める位置は？

◎→　芦沢務

ラジオの特徴は「安価、安直、安心」の3A、設問の「ラジオの占める位置」を保証するのがこの3Aだと考える。

受信機、制作費、提供コスト共に安価、聴くのも作るのも安直にして手軽、そして何よりも聴取者に安心を与えてくれるメディア、それがラジオなのだ。

昨秋秋の聴取率調査の改訂でラジオ聴取の主役は高齢者であることが改めて立証された。

テレビ、雑誌、映画、演劇、音楽等々あらゆるメディアが若者一辺倒に走る中でラジオは唯一の「高齢者メディア」としての位置を固めるべきだろう。豊富な知識、経験と判断力に富み、しかも小金を貯めている高齢者は今の日本で最もクォリティーの高い層であるはずだが、一方でこれほど軽視され、邪魔者扱いされている層もない。この人たちと正面から向き合い、メディアと聴取者の共同作業によって社会的発言力を確保すること、高齢者が活きる上での武器になるような情報を提供し、同時に彼らのホンネをすいあげて社会にアピールするメディアになればラジオは唯一、独自の存在になり得る。

細々と、しかし、しぶとくラジオはどっこい生きて行く。

（日大芸術学部非常勤講師）

フランク馬場氏の放送観

保科義久

テレビの受信料収入で運営されている放送局にあってラジオ番組を作ることは、大店の軒先を借りて商いをやっている露店商のようなものである。人事・予算などの制作条件は、テレビの事情で左右されるからだ。

現在のラジオは「音楽」「情報（報道・スポーツ）」「学習・講座」「聴取者参加（公開・電話・お便り）」などが主な柱といえるだろう。

「音楽」を例に挙げれば、ラジオから流れる音楽のほぼ100％は放送局以外の才能で作られたものである。モーツアルトもビートルズも、そのCD制作も、創造性・独創性は放送局以外の才能の中にある。

「情報」についても同じこと。

とすれば、放送局がラジオならではの創造性・独創性を発揮しているのは今のところ「聴取者参加」番組あたりで、あとはラジオドラマがあるのみか。

放送局とは商品（外部の才能）を包み送り出す包装紙のようなものだから「包装局」と書いてもあながちパソコンの変換ミスとは言えまい。

相当乱暴なまとめであるが、私見によるこれがラジオの現状である。

ところで昭和二十年代、NHKの検閲に当たったCIE（民間情報教育局GHQの下部組織）の監督官フランク馬場氏は、占領政策という枠組みの中で言論の自由を保障し、NHKの時事風刺番組を支えた人であったが、彼がアメリカに帰国する際に、

『NHKの若者達は、己の良心に従って思う存分の番組を企画・演出して（中略）スポンサー等の利己的制約を受けることなく電波に乗せうることを、ラジオマンとして天地に感謝すべき現象であり、公共放送の本文である』

と書き残して去った。

一見、NHK寄りの発言に思えるが、このフランク馬場氏、実は民間放送の生みの親でもある。

先日頂いた私宛の手紙で馬場氏は、

『民放各社は私が全国を廻って（開局を）奨励したものです。日本のテレビも私が古垣さん（当時のNHK会長）を口説いてアメリカの制度を採用させたので今日の発展があったのだと、自信をもっている』と書かれている。

言論の自由を保障するためにNHKと民放の共存こそが必要であり、権力におもねない独創性ある放送が民主主義社会を育てる、と語る馬場氏の夢と情熱。あれから50年…。

ラジオの現場は、NHKと民放の共存ならではの切磋琢磨が繰り広げられているだろうか。私の現場は、フランク馬場氏たち先達が抱いた『己の良心に従って思う存分』の独創性あふれる企画と演出が充満した《創造の場》であるだろうか。

私は『ラジオマンとして天地に感謝する』ほどのことを為しているか。

（NHKドラマ部オーディオドラマ班）

（問）→アンケート

「あなたにとってラジオとは？」

◎→　角岡正美

私にとってラジオ（ドラマ）は「私とは何者か」を探る自分探しの迷宮です。遠い昔、『尋ね人の時間』を聴いた時の不思議な感動（哀しみ）が忘れられない。行方不明者の「名前」と「住所」しか伝えられなくても、そこに一人ひとりが生きている、「生活」の歴史をもつ一人ひとりがいる、と強く感じたのです。

あの時の心のふるえが、私の原点でした。（元NHKドラマ　名古屋）

◎↓

私にとってラジオは友達以上恋人未満です。喜怒哀楽を強いることはできない…。

ただ、何かを心に残す〃物〃であり、〃何か〃を感じていただきたいと思って番組を作っております。

（南日本放送ラジオ制作部）
小林美悠紀

◎↓

「モバイル」「双方向」「ヒューマン」など、ラジオを象徴する言葉がありますが、いつでもどこでも気軽に楽しめ、人の心と心をつなぐコミュニケーションメディアとして、どんなに時代が変化しようと「ラジオは永遠に不滅である」と確信しています。しかし、営業的にも苦戦を強いられ、非常に厳しい局面に立たされていることも事実。それを跳ね返し、ラジオが生きるためには思い切った改革が必要と考えています。KNBラジオでは、新ソフトの開発、ラジオの生命である「情報のスピードと強化」など、新しいラジオを目指してアクティブに取り組んでいきたいと考えています。

（北日本放送編成局ラジオ放送部長）
田中和彦

◎↓

昭和46年、私は受験生で、その頃は深夜放送の黄金期でした。教養や音楽、ライフスタイル、そしておおげさに言えば、「人生」までもラジオによって影響を受けました。今、そうした影響力をラジオが、またはパーソナリティーがもっているか、疑問です。

それを疑問と思わず、努力不足、発想不足と自らを諌めて放送現場にいる一人です。

（南海放送ラジオセンター部長）
田中秋夫

◎↓

「放送人」という言葉を初めて目にしたのは1960年代に文化放送が発行したPR誌の、京大人文研の加藤秀俊先生の寄稿文の中であった。先生は「新聞人という言葉は存在するが、〃放送人〃という表現は未だ存在するとは言い難い」と書いておられた。あれから35年以上ラジオの仕事に携わっているが、果たして自分が〃放送人〃の名に価するのか、自信がもてないでいる。

（FM NACK5常務取締役）
三村千鶴

◎↓

隣にすわって会話するような、やさしいメディア。聴く人の頭の中にそれぞれの映像が浮かぶというより、制作者にとって、最高に作り甲斐のある特性が！

（中国放送ラジオ制作部）
山田有子

◎↓

独りの時間を過ごすときの都合のいい相棒。CDよりも温かみがあり、一人を感じさせないから。たとえながら聴取であっても親近感を感じられる打たれ強いラジオであってほしい。

坪内弘樹

◎↓

情熱的メディアでありたい。伝えたいことがぎっしりと詰まった番組を作りたい。伝えたいことが自分の言葉で表現できるパーソナリティーをみつけたい。今の日本人に伝えたいことはたくさんある。「情報」とは〃情〃に報いることだ、と最近理解できるようになりました。

（STVラジオ　プロデューサー）
＝原稿到着順＝

◇◇◇◇◇◇

◇◇◇◇◇◇

◆◆◆ 放送人の会 催事 お知らせ ◆◆◆

Inter BEEシンポジウム

『ミレニアムの放送

～私が創る『時代・劇』～

☆ 11月21日(木)AM11・00～13・30

・会場…幕張メッセ国際会議場2F

パネラー・能村庸一（フジ）、浅野加寿子（NHK）、小川治（テレビ東京）、石橋冠（演出家）

コーディネーター・今野勉（演出家・作家）

挨拶・大山勝美（本会代表幹事）

……

第4回『名作の舞台裏』

『北の国から』（フジ）

☆ 11月25日(月)14・00～17・00

・会場 横浜放送センター内ホール

・上映「第一シリーズ 17話」

・トーク(15・30～) 出席者 倉本聡 杉田成道 田中邦衛 吉岡秀隆 中島朋子 ほか。

（満員が予想されます。お早めに）

新刊紹介

◆『テレビ放送50年 テレビアートのすべて』

日本テレビ美術家協会編

「土手に座り爪をかじる」と台本指定。役者、うまそうに瓜を食べてる。サブコンで大山勝美、呆然として「ちがう、瓜じゃない。爪を噛むんだ！」。美術サン、爪を瓜と間違え八百屋でとりよせたのだ。俗に瓜にツメあり、爪にツメなしという。ことほど然様に裏方、とくに美術サンとドラマの関係は切っても切れない。そんな側面からのビジュアルなドラマ論として読んでみよう。たまには豪華高価本もいいもんだ。

（KKベストセラーズ　8476円）

◆ 石井清司『小澤征爾と子供たちへのまなざし』

還暦を過ぎた小澤征爾のライフワークは若いひとたちへの音楽メッセージだと言った。電通、フジテレビ、NECの協力による長野県の音楽活動を中心に、小澤イン・ジャパンの日々を追う記録。（NECメディアプロダクツ刊　1400円）

◆ 堀江史朗『ぼくの女優交遊録』

民放、東宝プロデューサー、博報堂とメディアで過ごした日々に過る女優人脈を中心に描くが、民放ラジオ初期の貴重な証言が読ませる。

（主婦の友社　2200円）

リレー放送現場史

『対談ドキュメント』の頃

原田庸之助

「対談ドキュメント」という番組をご記憶でしょうか。

28年前にテレビ朝日（日曜午前9・30～10時）で放送された番組です。

その頃、私は電通に在籍しており、サントリーの鳥井副社長（東京駐在）と稲見宣伝部長などと時折テレビ番組懇談会を開いておりました。

そのうち、サントリーが知識人や文化人を対象とする教養的な番組を一社提供でやりたいという意向をもっているのを確かめ、立案にかかりました。

当時出版界では雑誌や文庫で作家の対談がよく掲載されました。例えば、司馬遼太郎、松本清張、野坂昭如、石原慎太郎、五木寛之、等々。

これらの対談は、作家たちの考え方、感受性がよくわかるし、読み物としての面白さもあり、この雰囲気をテレビに誘導できないか、私は新しいテレビの対談番組ということで考えました。

出版の場合は、対談に編集者が司会的立場で介在し、収録されたものから、編集者の陰を極力消し、さらに加筆、除筆してまとめることになると思いますが、テレビの対談ではそうはいきません。司会者がいて対談者がいれば、司会者の発言からはじまり、対談者は司会者に向かって話すことが多くなり、対談者同士の話が継続的には盛り上がらないマイナスがあります。そこで思い切って司会者無しで、と考えました。

そうなると対談の両者が友人、知人であれば問題ありませんが、初対面の場合は話が弾むかどうかが心配になります。そこで有力なプロデューサーの存在が必要になります。プロデューサーが、両者のキャリアを充分に調べ、両者に事前に面談して、相手に対してどんなことを質問したいか、どんな話をしたいかをリサーチし、両者に予備知識を与えておくことが大切だと考えました。

最適プロデューサーと思いついたのが、テレビマン・ユニオンの荻元晴彦さんでした。荻元さんの快諾を得、企画はサントリーOK、となり、テレビ朝日の放送時間も決まりました。残念だったのは、夜の時間のつもりが、朝の時間になったことです。

制作に関してはテレビマン・ユニオンの荻元さんと坂本良江さん、電通の松前洋一君に一任しましたが、放送開始前にサントリーの鳥井さんと第一回のプレビュウを見ました。時の文相・永井道雄さんと野坂昭如さん（演出・今野勉）でした。教育問題について舌鋒鋭く野坂さんに対してまことに論理的に、穏やかに説明する永井さん。

新しい対談番組が現れた、という感慨がありました。これを皮切りに39回、約8ヶ月間の放送でした。対談の内容をいくつか紹介しますと、

「東京遷都論」小松左京対黒川紀章、「友情論」羽仁進対寺山修司、「女優」岡田嘉子対杉村春子、「旅と故郷」山田洋次対渥美清、「終戦秘話」迫水久常対石田博英、「革新論」羽仁五郎対石原慎太郎、「同期の桜」千宗室対西村晃、「人生真剣勝負」高峰秀子対扇谷正造、「文化勲章」中川一政対谷川徹三、「源氏物語と私」サイデンステッカー対市川崑、「芸は絹の手ざわり」淀川長治対坂東玉三郎　等々。どうですか、今と違いあの頃は単なる話上手ではない、文化の匂いや人柄がさりげなく漂う人生の達人がいたものです。

実は夜の時間帯への移行して再開を考えておりましたが、あっという間に28年も経ってしまいました。

放送人 雑俳選

笑われる笑いで笑えぬバラエティー
かしましや　夜半のテレビに呆れ果て
そりゃないぜ　呆れ果てるは永田町
恋すてふドラマにあきて笊碁哉
愛が勝つ　ほんとうかねと思案顔
長き夜をテレビにわたす愚か者

記号論的ドラマ時評

今秋の連ドラの特色は☺と☹の⁉的トレンディー・ドラマがめっきり減り、◎→刑事ものや、☆→ホームドラマに◇→オヤジもの◆→病院もの、あるいは、複合型が競いあっている。

・『おとうさん』（TBS）は☆と◇の合体型。正和もおやじ阪妻の歳となり、『破れ太鼓』が似合うか。☺

・『ダブルスコア』（フジ）はおちこぼれ（反町）とエリート（押尾）の反目コンビが結果協力しあい、犯人逮捕までの苦心談をみせる◎もの。☺

・同じ◎ものでも『真夜中の雨』（TBS）は、♥っ気は無く（結局は外科医織田と女刑事の松雪が♀になる）◎◆ものだが、「赤坂」調を押さえた乾いた演出が小気味いい。目下☹である。

・『逮捕しちゃうぞ』（テレビ朝日）。◎ものでも交通課の原沙知恵ら☹☹さんたちが女の「太腕」でワルモンを征伐するというお話だが、塩梅は☂印か。

・『天才柳沢教授の生活』（フジ）も☆◇ドラマでガンコおやじを高麗屋が生真面目にやってる。🍺も飲まない堅物だが、放置自転車や路上喫煙者に💢を命じ、モメる千代田区オヤジでもある。🚻感覚が無い教授は前途多難　☹

・『アルジャーノンの花束』（フジ）。知的障害者ものだが詩情あり、目下☺

・男はヤだけど子供は造りたい精子願望ドラマ『薔薇の十字架』（フジ）だが☹男が☹だったりして。天海っちゃんもご苦労さまです。今のところ🤔か。

（以上、☺に☹はあるが☀印は皆無）

某月某日・現場発

国名表記、日本語ブームに物申す

露木 茂

十月某日

北朝鮮は余程追いつめられているのであろう。日朝首脳会談から二十八日目で、百人ともいわれている拉致日本人のうち五人の帰国を認めた。一刻も早く経済協力が欲しいのだろうが、その手に乗ってはいけない。日本は毅然とした態度で外交交渉に望むべきだと思う。それにしても、日本政府はこの二十四年間何をしていたのか。「拉致はデッチ上げ」と公言してきた政党はどの面下げて弁明するのだろうか。腹が立つ。

この一カ月余り北朝鮮関連のニュース量が飛躍的に増えたなかで気になっていることがある。新聞は「朝鮮民主主義共和国（北朝鮮）」という表記をもちいているし、テレビ・ラジオは「北朝鮮＝朝鮮民主主義共和国」で始まる。なぜこの国だけいちいち正式国家名を連呼しなければならないのか？

九月十九日付朝日新聞には何と！十四回も「朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）」と書いている。「アメリカ」も「韓国」も「中国」もいわば通称であって「アメリカ合衆国」とアナウンスするのは大統領訪日の際の歓迎式典などごく限られた場合である。

そこで民放各局の若い記者やアナウンサーに聞いてみた。「新聞協会での取り決めでしょう」と言うのはまともな方で「他社もそうやっているから」とか、「原稿に書いてある通りに読む」という答えもあった。私が三十八年在職したフジテレビでは「北朝鮮」と言いっぱなしである。国交の無い国は互いにその存在を認めてないのだから、正式国名をアナウンスする必要は認めないという明確な理由からである。現在も私は「北朝鮮」で通している。

NHKはじめ各局は何故、正式国名をアナウンスするのか。その根拠は、畏友、重村智計の『北朝鮮データブック』で明らかである。

「一九七二年頃まで、日本のマスコミは『北鮮』の表現を使っていた。そこに朝鮮総連が新聞・テレビ各社に、表記を改め『共和国』とするか『朝鮮民主主義人民共和国』にするよう強く求めた。（中略）結局は、新聞協会が間に立って各社の編集局長を集め、記事の最初に書けば二回目からは『北朝鮮』でいいとの了解が成立した」とある（傍点筆者）。余談になるが、同級生である西木正明が今年六月に出版した『冬のアゼリア』は拉致の原点を描いたタイムリーな好作品である。

十月某日

週に一、二回は本屋に足を運ぶ。ここ数年、目に見えて客が減っている。本を読まなくなったという傾向は本当のようだ。そんなガランとした本屋で目立つものといえば「日本語」に関する本の多さである。昨年『声に出して読みたい日本語』なる一冊がヒットし、以来毎月のように日本語モノが出版されている。ここでひとこと、また言いたくなる。どの本を読んでも、いわゆる「もの書き」が理屈をこねてるだけなのである。

アナウンサーである私としては「声に出して読む」ときに、どんな声で、どんな発音で読むのかが問題だと思うのである。「鼻濁音」や「無声化」について解説している本は一冊も無い。「日本語を正しく話せる」と答えた小学生は九パーセントしかいないというではないか。もっと正しく話す、正しく発音するということに、フランスやイギリスのように教育現場も力を注ぐべきだと思う。もっとも、きちんと教えることができる教師がいないことの方が問題なのかもしれない。

（「おはよー！グッデイ」キャスター）

忘れられぬ一行　！

新春号企画。あなたが関わった番組で気になるせりふ、肝に銘じた一行、インタビューに応じてくれた人の一言…忘れられない言葉の採集を載せたいのです。

事務局までFAXください。

あとがき

◆駅前商店街は100円ストア進出で文具店が潰れ、事務局界隈の麹町はビルが乱立、ドトールやスターバックスの包囲網化で「サテン」が絶滅した。モーツァルトかコルトレーンで過ごす「時間業」的喫茶店がさびれて久しい。

地上波テレビも様子はそれに近い。

◆元来放送とは時間業だった。深夜スタジオ使用が許されていた頃、スタジオ表にスタ管氏は25・00～27・00、3スタなんて指定したもの。泥棒ではあるまいし、丑三つどき時間業とは！

◆AM・PMの生活観念を失うことで成立する時間産業は今やコンビニに移行した。深夜放送は盛んでも妖しげな深夜感をもたないガサツな作品が目立つ昨今「カノッサの屈辱」が懐かしい。

◆サブコン賭博をご存じか。ストップウオッチ、スタート！　カチカチカチ。胴元は急にストップして、さて何秒？54秒！　とピタリと当てるヤツがいた。時間博奕で儲けるのはたいがい効果班の連中だった。往時茫々である。

◆新聞記者の定年はエンピツを捨てることだが、定年放送人は「時間」を社屋に置いて去ることはない。何故なら時間は肉体化してるから。バブル崩壊で空間プロデューサーは滅んだが、時間プロデューサーはしぶとく生きてるゆえんだ。時間よ、止まれ、でも止まるな。小林一茶も詠みました。

名月や　けふもあなたはお急ぎか

◆「会報」編集も録音構成の仕事に似ている。皆様の玉稿の一つ一つに「時間」の匂いが漂ってくるので。（松尾）

様

アンケートへのお願い　（伊藤、松尾）

謹啓

小言いふ相手もあらばけふの月　　一茶
小言いふ相手のタマは尻をむけ　　馬笑

血なまぐさいお噂ばかりの今日この頃、小言どころか、お互い怒鳴りたい心境でありますが、会員の皆様にはいかがお過ごしでしょうか。

さて、会報の新春号では、会員全参加によるアンケート特集を企画しました。つきましては、玉稿をいただきたく、よろしくご協力をお願い致します。

設問：あなたにとって結局、テレビ（ラジオ）とは何だったのですか。
（いまも現役でおられるあなたにとっては･･･何ですか）

「･･･にとって･･･とはなんですか？」という問いかけは、今でこそ不勉強な新米アナや制作者がとりあえず口にする質問で、取材対象と制作者との架橋、関係性をあいまい化し、相手に下駄をあずけてしまうルーチン用語に成り果てていますが、かつては鮮烈な切り口をもった問いでありました。

はやりだしたきっかけは、ドキュメント『あなたは･･･』（TBS 66年11月22日放送）および、建国記念の日にちなんで企画された『現代の主役　日の丸』（同局67年2月9日）からだと記憶しております。世間が、世の中が、右も左も、会社も組合も、家庭も、体制がそうなんだから「だからわたしも」ではなくて、あなたは、どうなんですか。あなたの言葉がほしい。そして「あなたは･･･誰ですか」と、番組で少女は人混みの中で問い続けました。

「大衆」「民衆」「庶民」「市民」の意味合いの本質をたずね歩いた画期的な問いかけが「あなたは･･･」でした（ちなみにあの頃のキーワードは、ベトナム戦争、文化大革命、ビートルズ、ヒッピー、ツイッギィー、深夜放送などなどでした）。現代のさまざまなキーワードを背景にして、あなたにとって結局、放送とは何だったのですか。青臭さを承知の設問の趣旨であります。

◎　締切：１２月１０日　　字数：２５０字～３００字 以内

（FAX：03-3221－0019、or〒102-0094千代田区紀尾井町1-1千代田放送会館内放送人の会宛でお願いします。下記に書き込むと便利です。

＝ 書き切れなければ＝

･･･････････････････････原稿････････････････････････

(1)あなたにとって････。

(2)影響を受けた本、映画、舞台･･･:

氏名		このままでFAXするか、または郵送して下さい。
肩書　（よろしければ）		

（2）のお願い
同封の会報記事にもあるように50周年に因みまして、『放送論研究会』を設け、放送関連諸団体とのコラボレーション活動を構想しております。
手始めに諸姉諸兄が実作の折々に影響を受けた書籍、映画、舞台あるいは事件、社会的トレンドなどを列記して戴ければ幸いです。新企画の方向性を見極める参考資料にさせていただきますので、よろしくご協力ください。

文責：松尾